

福田恆存における批判精神と自我の構造

—近代化の問題めぐって— (2)

村永 次郎

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Frame of Critical Mind and Self in Fukuda Tsuneari

—In Reference to the Problem of Modernization of Japan—

MURANAGA Jiro

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this paper the author is concerned with the total framework and contents of Fukuda's world of ideas. By making this point clear, it will be possible to penetrate into the frame of self that underlies Fukuda's thoughts and actions in his dealings with various issues and problems political, social, historical, literary, dramatic, and personal. And in his mental and intellectual struggles to cope with these matters Fukuda's own thought as a person, a Japanese and an individual reveals itself.

2 思想

福田の考え方を理解するため、思想の形成過程・活動状況などを概観した。ここでは、福田の思想全体がどのような考え方で成り立っているのか、その思想体系と内容を明らかにする。

福田の思想の根幹をなすのが、ロレンスから得た、人間に焦点を当てた「人間観」であり、福田の見る日本と西洋との本質的差異は、「絶対者」としての「神」の有無である。日本における「神」の不在が、西洋との付き合いにおいて、致命的な文化的弱点となり、福田はこれへの対応を最も重視する。

それは何故か。人間の持つ最も対処の難しい面である「我意」、これが様々な問題の根源と、福田は考える。この「我意」と如何に向き合うのか。

日本の文化はこの「我意」を避けるもので、西洋は逃げず「神」を設定した。この対応の差で、日本に大きな弱点を生じることになった。この弱点克服のため「神」に匹敵する「何か」が必要となる。あるいは別の視点が要請される。

福田は、西洋における「神」の代わりに「全体」

を設定した。我意を有する己は信頼に値せず、全体の中の部分として個人を位置づけることにより自己の役割を認識し、我意を制御しようとするものだ。

具体的に認識し行動する方法が「演戯」である。肉体は現実拘束されるが、精神は時間を超越して全体を眺望でき、あるべき自分の役割を確認できる。

『人間・この劇的なもの』の中で明らかにした、意識において役割に基づく自身の行動を評価、全体への貢献から充実感・達成感を味わうとともに次の行動を見据えて行く。これが「演戯」の意義だ。

次元の違う「全体」への貢献という意識により、我意・我欲を制御する可能性が高まり、人間としての信頼性が向上することになる。これが福田の思想の根本であり自我の本質をなす。思想の根本を受けどのように思想が体系化されているのか、その構造を見てみる。

日本文化、特に神の不在という西洋文化との本質的差異に焦点を当て、そこから生じる文化上の弱点を補足しようとする思想が「二元論」、「全体と部分」、「歴史観」である。

次に、日本人に焦点を当てる。思想的態度に問題

があるとして「批判精神」を、近代化問題に直結する、人間社会発展のあり方としての「進歩主義批判」を取り上げる。

個人の行動の規範としては、「宿命観」、「演戯」があり、完成形としての個人のあり様を示すのが「個人主義」である。この確立を持って日本人の精神の近代化ができるとしている。

福田の特長は「思想に行動が伴う」ことである。明らかにした構造によって、人間に始まる抽象的な思想から個人の行動に至る思想体系が明確である。このように、根本としての「人間観」及び「神」の捉え方及び思想体系により福田の自我の構造が見えて来る。

福田の思想は視点を変えれば他にも多くあるが、もう1つの特長である「物事を本質的に捉える」ことから、ある1つの視点で福田の思想を分析・整理しても福田の思想の全体を明らかにすることが可能である。ここに取り上げた各思想も根底では互いに関連しているのである。

この章では近代化問題を焦点に、今まで明らかにした福田の各思想を概観し、後述する福田の精神の近代化に関する実践を理解する手掛りとする。それは福田の自我の構造を明確にすることと同じ意味をなす。

2. 1 人間観

福田の物事を考える上での特徴は、本質的に物事を掘り下げることである。毎日起こる出来事、つまり現象に惑わされず、その現象を起こす源は一体何であるか、深く思索する。主要な思想について後に詳述するが、思索の根底に人間観がある。それが、他の知識人達との根本的差異である。論争において、次のように述懐する。

「平和論」論争などで、いわゆる「進歩主義者」の反応を見ていると、彼等の「人間観」と私のそれとが、いかに食いちがっているかを痛感した。(中略) 率直にいうと、彼等と私の間で人間観が異なっているのではなく、私は人間観から出発しているのに、彼等はそこを素通りし

ているのである。

(『評論集2』後書 p.318)

このように、福田は他の知識人との違いを指摘する。社会の様々な事象は人間の行為の結果であり、その行為の良し悪しを考えるには結果から判断するのではなく、何故そうしたのか、起こったのか、行為者である「人間」とは何かを判断基準にしなければ本質的究明に繋がらないと考えるからである。

福田にとっては、政治も防衛も文学も人間観に基づく倫理的、道徳的な立場での発言であった。福田の著作に『人間不在の防衛論議』や『人間不在の歴史観』というタイトルの本があるのは、福田の姿勢を如実に物語っている。

福田はある場所で、「私は小柄口な要領のいい人間は嫌いである。私は何々派だの何々主義者だのであったことは一度もない。私は何を書いても、ただ人間について、常識的に論じているだけである」、と言っている。それでは、「人間観」とは具体的にはどういうことか。

日本人にとって、西洋で言う絶対者としての神の観念は薄い。そのため、人間は不完全で過ちを犯すと言うこと、あるいは偏った考えを持つことが往々にしてある、と言うことを看過し易い。そのため、人間が構成する社会も完全ではなく、不合理で矛盾が存在することに思いを致さない。

そんな中、人間は不完全であると認識する福田は物事を疑う。自分でさえ信用しない。知識人達は、この人間観を念頭に置かないため、自分達は完全である、論理的に間違い無い、と自己絶対化を図る。そこが、福田の指摘する所となる。

次に言えることは、「人間は意識の生活」をしていることだ。¹ 現実の世界とは別に、意識の世界—精神と言っている—をそれぞれ持っており、その世界は誰も知ることができない。人間の最も本質的な部分であり、ここに人間の我意(エゴ)が存在する。

パスカルが『パンセ』の「力と正義」²で指摘しているように、人間は、皆己が正しいと思っている。エゴ同士であれば、相対化の世界であり決着はつかない。そこでどうすべきか、福田は、エゴ一時にこれは自己欺瞞であり個人的我意、集団的我意となっ

て現れる一との格闘に全力を注ぐことになる。ただ、話しはこう単純ではない。次のように述べる。

人間にとって、自分にとって、最も手に負へぬものは政治的、経済的、社会的な諸条件ではなく、実は人間そのもの、自分そのものなのである。(中略) 自分にとって一番どうにもならぬものは自分であり、人間にとって一番どうにもならぬものは人間である。前者の考へ方は道徳に、後者の考へ方は宗教に道を通じている。

(「全集6」『真の自由について』p.226)

従って、知識人達は困難な故に素通りしたのであろうし、問題の大きさ故に気づきもしなかったと言える。ただ、誤解してはならない。人間そのものは手に負えず問題の解決が難しいかも知れない。が、不可能とは必ずしも言えない。

人間観を描き、物事を考え、行動し、理想に近づこうとすることは、意識すれば出来ることである。そのため、福田は、素直に人間観を意識した、常識的な物言いをしているだけだと発言するのである。

それでは、人間観を無視するとどのような弊害があるというのか。逆説的に述べるなら、福田の全ての著作、言動・行動に表れている。端的に表現すれば、誤った個人主義・相対主義から脱却できず、人間の矛盾、社会の不合理に翻弄され、充実した人生を送ることが出来なくなるのである。そして、徹底した人間観としてこう述べる。

生の終わりに死を位置づけえぬいかなる思想も、人間に幸福をもたらしえぬであらう。死において生の完結を考へぬ思想は、所詮、浅はかな個人主義に終るのだ。中世を暗黒時代と呼び、ルネサンスを生の賛歌と規定する通俗的な史観や、封建時代に死臭をかぎつけ、現代に生のいぶきを感じる過つた人間観は、すべて個人主義的なヒューマニズムの所産にほかならない。

(「全集3」『人間・この劇的なもの』p.592)

こういった発言が妄言でないことは、先に紹介した、井尻氏が病気で亡くなる寸前の福田を訪ねた時

の、「自分の死まで距離を置いて見ているのか。」と、驚いたエピソードを思い出して頂ければ十分である。

今後明らかにする福田の思想も、全てこの様な観点で捉える必要がある。単なる評論ではない。福田の思想は、常に誠実で行動を伴う嘘偽りのないものである。ここで重要で忘れてならないのは、「ユーモア」である。疑いばかり持つだけの懐疑主義者ではない所以であり、真に人間的な生き方として信じているのだ。人柄の所で見た通りである。

2. 2 二元論

相互に対立する、還元不可能な独立した二つの実体或いは原理を認める、例えば、光と闇、天と地、善の神と悪の神など宗教的二元論。哲学においては、デカルトに代表される物心二元論がある。

東西、左右、上下、前後など一對の言葉があり、一方だけを取って、片方を棄てるわけにはいかない。東があるから西があるのであり、両方で初めて全体を現し意味をなす。

福田は常に本質的な思考を心掛ける。そのため、相対立する二つを設定することによって全体を現し、それを掴むことはできないが、現象に惑わされることなく、全体に、本質に近づこうと努めたのである。それは、生命に関する福田の言葉から類推できる。

キリスト教だけでなく、ギリシア、エジプト、ペルシャ、バビロニア等古代異教の最大の祭日はことごとく復活祭的意味を持った、死から生への秘儀と捉え、次のように述べている。

私たちは生それ自體のなかで生を味はふことはできない。死を背景として、はじめて生を味はふことができる。死と生との全體的な構造のうへに立つて、はじめて生命の充實感と、その祕密に參與することができるのだ。

(「全集3」『人間・この劇的なもの』p.590)

そして、こう述べる。

すべてが二元論です。愛と憎、善と悪、生と死、平和と戦争、すべてがさうです。しかも、

それぞれの二元論的対立が、それぞれに絡みあひ、はてしが無いのです。

(「全集4」『絶対者の役割』p.285)

この二元論は、二律背反と言い換えた方が理解容易である。ここに真実に至る生き方を見ることが出来る。人間は完全ではない。自分に自信を持つことは一見重要に見える。しかし、先の間人観で述べたように、実は陥穽に落ち込む危険性を孕んでいるのである。

従って、常に逆の発想を同時にチェックする二律背反、二元論の思想が大切となつて来る。これと同時に見落としてはならない点がある。

日本人の文化的弱点として、多くの方の指摘する「論理力」がある。感性や情は豊かであるが、論理性に欠ける場合が多いことを指す。グローバル化し弱肉強食の国際関係においては論理力がないと他国に太刀打ちできないのである。

福田の指摘する「二元論的対立は果てしなく続く。」と言うことは、全く逆の発想を持つ相手を説得あるいは自分自身の考えに納得するために論理性が重要となることを暗示している。論理がなければ相手にされないのは道理である。

常に対立概念を想起し全体を思い描き、我意に囚われず自分の役割を認識するとともに二元論的対立の中から論理力を磨かなければならない。

だが否定を繰り返し収斂しないジレンマが生じる。そこで福田は、この二元論的対立による弁証法的悪循環、あるいは歴史主義的なユートピア思想を最初に、そして最後に断ち切るのが絶対者であると説いている。こういった意味からも福田は絶対者の代わりに全体を設定したのである。

2. 3 全体と部分

個人は、社会の一部、すなわち部分であり、社会が全体である。額面どおり受け取れば難しい概念ではない。しかし、勘違いしてはならない。ただ単に大きさのことではない。質の相違、次元の差を言う。

簡単な例を示すと瓶ビール。部分である蓋、ビンをいくら集めても製品としての瓶ビールにならない。

合体して、つまり全体を構成して製品としての価値を有するビールになる。質、次元の変わったことがよく分かる。

人間は知識を積み重ね、情報を集めて行動する。しかし、それは不十分な量であり、知識全部を得、情報全てを収集し行動することはできない。全体を掴むことは不可能で、どこかで決心、行動しなければならない。部分の間人と全体とは次元も違う。

一方、次のような例を示す。

個を集めたものが全体であるのか。それはただ数量の概念か。さうではありますまい。全体と個とは質の相違であります。そこには次元の差があるのです。(中略)全体主義國家の危険は、民族や権力や階級を否定する精神的自由を個人に許さぬといふことであります。私はかならずしも英佛を支持しはしないが、英佛の國家的エゴイズムはその國家内に自己を否定する異分子の存在を許してゐるといふこと、そこに私は個人と同様に、國家の人格といふものを感じるのです。そこでは、個人がそれぞれに全体を所有し、それによつて國家を否定してゐる。つまり、その全体といふのが、國家を超えるものであり、現實を超えるものだからです。

(「全集4」『絶対者の役割』p.281)

人間・人間社会の精神面が対象だ。福田の関心はそれらのあり方にある。否定要因を内蔵する国には人格が感じられ、その否定要因とは全体概念、ここでは絶対者を指す。否定要因を持たない全体主義國家は自己絶対化を図り、健全な発展はできないと言うことだ。

部分である人間の構成する國家も部分を免れず完全ではあり得ない。不完全な國家の健全な発展には全体が要請され、それが絶対者である。

キリスト教の觀念論の世界においては、個人の中に全体を含み、それが精神である。その各個人が有している精神を、万人共通の人格神として取り出したのがキリスト教だと福田は指摘する。³

各個人は國、神との2つに関係し、その神が絶対者、批判精神として理想に照らし人間社会、國家を

否定する。それが健全な社会の発展を促す。質の相違、次元の差とはこのことである。見方を変えれば部分としての自覚、限界を意識する謙虚さが返って全体を見通すことができ、健全な発展に繋がると言うことである。

日本の場合、このような全体概念はあるだろうか。西洋の絶対者に当たる神は存在しない。後述するが、批判精神も欠如しており全体概念のない世界である。しかし、全くない訳ではない。

日本の寺院建築は西洋の建造物とは違って部分々の代替は基本的にできない。西洋は過去や他の建造物の石材で対応できる。各部分に特別の役割は存在しない。日本の場合、各部材の寄せ集めが寺院ではなく、寺院全体の調和、美の部分として夫々が役割を有し代替が効かないのである。⁴

部分の中に全体がある、部分に全体に資する独特の美を有することで数の要素と質の要素の2つを持ち、全体は調和された統制美で次元が違う。

寺院の例を個人に適用すると、一人一人が独立し、替え難い役割を有していることである。それは存在感であり逆説的には孤独感だ。日本文化においては難しい問題であり、個人主義に繋がるものである。

西洋と日本では「全体」の概念が違った。西洋は国家を否定し、日本では部分毎の感覚的なものであり国家全体に及ぶものではない。1つ1つが林立している。また、西洋の全体は意識的に作られたものであり、日本の場合は文化と言える。この違いを認識することが必要である。

この差異を承知することは、明治以降の西洋文化の吸収、すなわち近代化が健全であるための要であり、同時に、日本における西洋流の「全体」をどうするかが課題である。相対主義の中で、各個人が自己絶対化を図るようでは各個バラバラの様相を呈し、力が分散し諸外国に対応困難である。どうしても「全体」が要請される。

一方で次のように指摘をする。

生はかならず死によつてのみ正当化される。

個人は、全体を、それが自己を滅ぼすものであるがゆえに認めなければならない。

(「全集3」『人間・この劇的なもの』p.593)

死を背景にして生の充実感を味わうことができ、生は死によって正当化される。葬儀の場において人は実感している。キリスト教などの復活祭が最大の祝祭日であるのもその意味である。

ヒューマニスト達の、安易に生が死の脅威であるとし、同時に、生を楯にあらゆる事を正当化することに対する怒りである。現実の国においても防衛するため軍に死を求める。全体のために個人は滅ばなければならない。全体を考えることによって各個人の価値、人生が逆に力強いものになることを強調しているのである。

井尻氏が福田を見舞った時、驚嘆したことを述べたが、まさに言動一致であって違いが明確である。自由や人権などと言って、個人が全体から離脱しがちな今日において、この視点からも、強調されている思想である。

2. 4 歴史観

福田の歴史観は一般の歴史家と異なる。一般的に、歴史家は歴史的事実を見て自分なりに解釈するのは良いが、自分に好都合な考え方、言葉によって整理し、不都合な事実につぶかると無視するか、新たな言葉を持ち出す。また、時代区分の説明においても、他との差異や因果関係などを見事に表現する。

福田は、こうした歴史の見方は本質を見過ごした現象論であり、歴史家の価値観だけの単純な一元論に陥ったり、何とも納得できない不透明さを残したりするものと批判する。

ぼくたちはひとつのアナロジーを頑強に固執する。といふのは、個々の歴史的事実を發掘し、これを処理するのは科學であらうが、それらの素材の底に流れる一貫性の歴史意識は、あくまでぼくたち個人の成長にまつはる、まことに個人心理的な類推によつて把握しうるであらうし、歴史家が歴大な歴史的事實のまへに感ずる困惑感もただこの類推によつてのみ解決されるのである。 (「全集2」『近代の宿命』p.436)

福田は、歴史とは歴史意識、すなわち当時の人達の心理、観念、文化ではないかと言っているのである。ここにも福田特有の本質的な把握の仕方があり、表面的な事実をいじくるのは歴史ではない、類推が重要だと言う歴史観である。歴史とは精神史であるとするヘーゲルの歴史観と同じであろう。⁵

人の成長に例えれば、肉体はどんどん変化していき精神も変化していく。変化していく中で人生上の色々な出来事が生じる。それは肉体ではなく精神が関与するのであるが、精神と出来事との因果関係は見えづらく合理的説明は難しい。事実だけでは何故そうなったのか分からず、類推によると言うことである。歴史も人間観を通して見ているのだ。

歴史家の歴史を見る態度、接する態度も批判する。歴史を結果から見る態度である。結果は解かっており、そこに因果関係、必然の法則を読み取ろうとする、そのことである。何故、それが問題か。これも人間が抜け落ちているからである。

人間が考え、行動する時、色々な方法を考えたり迷ったりし、結果として1つの行動を選択し歴史的事実が残る。その際のあれこれ悩んだ内容や何故その方法を選択したのか、あるいは結果としてなったのかが無視されるのである。

見たい事実だけを見て、見たくない物には蓋をする。あるいは気づかない。そうして都合の良い結果を導く。真実は隠され歪んだ歴史が残る。次のように福田は言う。

歴史家が時代や人物と共に生き、共に迷ふ心の持主でなければならぬのは、言ふまでもなく歴史上の人物が、歴史そのものが、迷ひながら生きてゐるからです。その場合、ある人物が「正しく決断した」といふのは結果論的な言ひ方に過ぎず、事實は單にその人物の「決断が正しかった」もしくは「正しいことになった」のに他なりません。詰り、歴史は唯一の結果にしか到達し得ないのに、あらゆる結果を内に孕みながら進行するのです。

(「全集5」『人間不在の歴史観』p.381)

更に重要な観点として、西欧の中世・近世・近代

は一つの歴史を形成していると指摘する。いずれの時代にも共通の全体観念があるからである。共通の全体観念とは絶対者である。福田は述べている。

この歴史の意識をヨーロッパにはじめて植ゑつけたものが中世であり、そのキリスト教にほかならなかつた。ギリシアに歴史はない―絶対者のないところに歴史はありえないのである。

(「全集2」『近代の宿命』p.460)

こうなると当然、日本には歴史がないことになる。次のように述べている。

日本人のばあひ、中世と近世とは、近世と近代とは、それぞれの時代に、全體的観念の書きかへを要求されてきた。それどころか、戦前と戦後とでも、書きかへが必要とされたのであります。そんなところに、伝統や歴史の観念が生じるわけがありません。歴史的事實はあるが、歴史はない。

(「全集4」『絶対者の役割』p.284)

この指摘は近代化問題にも大いに関係がある。正しい歴史観を持たないため、時代が変わる時の全体的観念の書き換えに気づかない。

明治の近代化にあたり、国内での書き換えならまだしも、洋魂が和魂に押し入って来たことを見逃した。西洋の文化が日本の文化を書き換えていることに気づかず近代化と勘違いした。ここに現代まで続く混乱の元があるのである。

福田にとって歴史は当時の人の心に接することであり、過去を共有すること、自分の中にそれを自覚することなのである。歴史は人間が行動した結果である。当然、迷い、判断の誤り、非合理、権力的なことなどが多くあり、その事実を抹殺することはできない。ただそれとの付き合い方を会得しうただと述べている。⁶

2. 5 批判精神

「批判」は辞書によれば、誤り、欠点を指摘し正

すことで、「批評」の善し悪しを評価する意味とは少し異なるようである。福田は、「批評」を多用しているが「批判」も使用する。ここで言う「批判精神」と『批評精神』（福田恆存全集第2巻所収）は、ほぼ同じ意味と捉えてよい。評論集の第1巻と第4巻の覚書に同じ趣旨のことが書かれている。

戦後の批評を特徴づけた抵抗と否定とは、直接と間接とを問はず、そのほとんど全部が戦争中の政治的弾圧にたいする反撥から出てゐた。
（『評論集1』覚書 p.290）

私はそれが過渡的な場でしかなく、「近代」とか「自我」とかいふ言葉に人々が感じてゐる重みも色あひも戦争中の反動しかないと思つたのである。その主観的な情念のために、「近代」の限界も「自我」の正体も見えなくなつてゐることを、私は一所懸命に説得しようとしてゐたのだ。
（『評論集4』覚書 p.286）

ここにも、本質的に思考する福田の姿勢が見事に現れている。重要な点は、表面的な反発、否定の繰り返しは何も生み出さない、本質的事項、本来あるべき姿、限界、可能性が見えないと言うことである。

日本文化には、常に新しいものに乗り換えて行く、という1つの特色がある。後代が前代を否定し別なものを作る。これでは、理想に近づいていかない、歴史を形成しない。福田の言う批判精神は、人間の生き方、日本人の生き方に迫ることを指す。⁷

かといって明確な生き方があるのではない。常に模索している。真の生き方と自分を含む人間、日本人の生き方との対立の中で模索しているのである。そこが、他の知識人達との違いである。

批判は否定することであり、本質的には対立の精神である。単なる否定でないことは今述べたとおりで、辞書通り「正す」ことでもない。対立の中から真の姿を求めていくことである。そこを知識人達は理解できないため、福田を懐疑論者、論争屋だのと、その時々現象論から批判する。

この批判精神は、先に述べた「二元論」の思想と根底では共通している。二元論も根本は対立の精神

である。日本の文化には一元論に陥り易い面がある。歴史の書き換えや新しいものになり換えていくのもそうである。

単なる繰り返しに過ぎず、そこには論理性は生まれない。そういう文化だからこそ批判精神が必要とされるのである。

福田にとっては、劇も翻訳も対立の精神であり⁸、そのものの本質を見据え、批判的に作り上げていく。全てのものに常にその様に向き合う。従って、自己でさえその対象となる。ただ、自分に自分を批評させては真の自己に到達できないとして、次のように述べる。

真の自己批評は演戯することである、演戯することによって、私たちは自分を、自分以外のものに、あるひは自分以上のものに、批評させることができるのだ。

（『評論集1』後書 p.294）

福田の言う批判精神を理解するにあたり、言葉の上辺上の解釈では意図することは掴めない。本質的に思考することと並んで重要なことは、何度も述べてきた、行動を伴うことだ。口先だけの批判では何も生まれない。戯曲も翻訳もそういったものであり、自己の本来の姿に迫っていくのも、演戯という行動が必要なのである。近代化が似而非近代化、西洋化になったのもこの批判精神の欠如であり、真に西洋と対立することがなかったからである。

2. 6 進歩主義批判

進歩は有史以来の規定の事実である。進歩は現実であり人間そのものである。その現実のあり方そのものが主義であるとはどういうことか、と福田は訝る。

進歩主義といふ言葉を平たく解釈すれば、社会を進歩させようとする思想的態度といふことになる。だが、その実情を見れば、むしろかう定義したほうがよい。つまり、それは社会を進歩させまいとする方策を阻止しようとする思想

的態度であると言ったほうが、より適切なやうに思はれる。

（「全集5」『進歩主義の自己欺瞞』p.172）

進歩主義は科学や技術と同じではなく、直接現実を動かす具体的な方策ではない。時代の気分過ぎない。では、それが何故に主義となるのか。福田はそれをこう見る。現実には動く、進歩する。その時、人々は易しさを欲し便利を欲するから、その現実に従った進歩主義を唱えた方が良く考えるからだ、と。そしてそれが正しい事となり、最高の価値まで祭り上げられる。単なる現象論であり、世間受けを期待する自己欺瞞でしかない。

具体的な方策でないため試行錯誤をしない。良い所だけを見て勧める。欠点を見ようとしもしないし探そうとしもしない。問題は現場で起こる仕組みである。勧めたものは一切関知しない。

進歩主義者は、「進歩は自然そのものであり必然悪かつ必然善である。」ことを見落とし、人間の本质が二律背反にあることにも思い至ってない。方法論的に考えている科学が無邪気に信奉され、危機感が生じないのである。

進歩について、認識の誤りを犯した上に、日本は後進国としての宿命を背負った。近代日本の歴史は、向こうのお山である西洋の麓を目指す運動に他ならなかった。追いつくことに必死で、追いついて何をするのか、どうしたいのかがなかった。ただ進歩し追いつくこと、それ自身が目的となった。そこに生の充実感を感じたのであり、福田は一種のマゾヒズムでないかと言う。

そのために近代化問題が起こった。ただ進歩することが至上命令であり、立ち止まって、現場で西洋文化と日本文化との衝突や混乱が起こるなどと考え余裕はなかった。

こうして、進歩を社会改善の唯一最高手段と見なす急進主義を生んだのである。欧米先進諸国においては、常に未知の世界への挑戦であったため進歩は最高手段となりえなかったが、日本においては、その先進国が成功済みの、実験済みの方法であるので失敗の危険はなかったのである。

福田はそう嘆じて、更に次のように指摘する。

過去、現在、未来のいずれをもひいきにしない絶対者といふのは、そのいずれをもひとしく否定する超絶的なものでなければならない。この神の前においては、進歩といふことはありえぬのです。歴史も伝統も、進歩といふ意識からは決してとらへられぬものです。進歩主義においては、「大は小を兼ねる」式に、過去はつねに現在のうちに、現在はずねに未来のうちに、呑みこまれてしまふ。つまり、歴史は存在せぬのです。（「全集4」『絶対者の役割』p.285）

効果や便利さ、容易さを追うところには、知らず知らずの内に目的・精神が置き去りにされる。明治期の近代化はまさにそうであった。

物質的效果は目に見え確認できる。精神的なものは分かりづらい。効果だけを追求し提供すると多くの人は喜ぶ。しかしながら欠陥だらけの成果であり、現場で西洋文化によって日本人に精神的混乱が起こるのは必然であった。

進歩主義による物質的效果だけを念頭に置いた、精神、本質を忘れた断片だけの歴史的事実の積み重ねでは、本当の伝統・文化、歴史は築けないだけでなく、大きな問題点を孕んでいるのである。

2. 7 宿命観

宿命論として、世の中の出来事は全てあらかじめそうなるように定められており、人間の力ではどうにもならないと言う考え方がある。福田の宿命観は、勿論それとは違う。辞書によれば、宿命とは生まれる前の世から定まっている人間の運命とある。福田はこれに異論はない。福田の関心はこの宿命の捉え方、向き合い方である。宿命と対立関係にある自由に関する多くの人の捉え方に関する疑問である。

福田は、戦後と戦前の行動原理の違いを、個人の自由と生命の尊重にみている。戦後は、何をしても良いとする自由観と生命は地球より重いとする生命至上主義のために拠るべき道徳を失ったと、福田は分析する。この行動原理はエゴイズムから発しエゴイズムに帰結するもので、エゴイズム抑制のルール

である道徳が機能しなくなると捉えているからだ。

そこで、人間にとって「自由とは何か」と、問を発し、人間の生涯の主要を決める生誕が全く不自由であるとして、次のように述べる。

私達は宿命そのものを素直に認めなければならない。私達人間の自由は、宿命の手の附いていない「お余り」の領域における闘ひにではなく、その反対に私達のどうにもならぬ宿命そのものとの闘ひのうちに見出されるものである。まづ第1に、どうにもならぬ宿命をごまかさず素直に認める事、第2に、どうにもならぬと承知しつつそれと闘ふ事、そこに真の人的自由がある。

(「全集6」『真の自由について』p.225)

福田は、死は自ら選ぶこともできるが生誕は個人に選択の余地、自由など全くなく、残っている自由など「お余り」に過ぎないと喝破する。これを宿命と言わずに何と捉えるのかとの指摘である。

このように宿命の支配下にある人生を真に自由に生きるため、積極的概念の自由にするため、宿命と素直に向き合うべきだとの主張である。

「闘い」は「生き方」と見てよいであろう。人生の主要を決めている宿命を棚に上げておいて、お余りの自由に人生の全てがあるような見方は間違いではないかとのことだ。決して、悲観的に見ているのではない。自然科学や社会科学によっては除去できない、自分の人生の鍵を握っている宿命とともに生きよということだ。そして、この様に述べる。

すでにいつたやうに、私たちが欲しているのは、自己の自由ではない。自己の宿命である。さういへば、誤解をまねくであらうが、かういつたらわかつてもらへるであらうか。私たちは自己の宿命のうちにあるといふ自覚においてのみ、はじめて自由感の澁刺さを味はへるのだ。自己が居るべきところに居るといふ実感、宿命感とはさういふものである。それは、なにも大仰な悲劇性を意味しない。宿命などといふものは、ごく単純なものだ。

(「全集3」『人間・この劇的なもの』p.527)

言葉を換えて言うならば、必然の人生を生き抜く思想、哲学である。どこまで走ってもゴールが見えないマラソンは、疲れるだけで嫌気がさす。ゴールが分かって力の入れようや勝負の仕方ができると言うものだ。

これと同じように人生にも宿命と言う枠があって、この枠内で自分の力を自由に発揮する。これが自由感の澁刺さである。何でもできる枝葉のような自由は人生に深み、充実感をもたらさない。

宿命に向き合うとは、この枠を見出すこと、人生における自分の役割の探求である。これが宿命との闘いの意味であり、そういった生き方である。

積極的に宿命を捉え、社会の中における自分の位置を自覚し力を出し切った時、必然の人生を生き抜いたことになる。

誤った自由観、安易に楽を求める心境、これらでは決して充実した人生を送ることが出来ない。見方を換えれば、宿命感とはエゴ克服の方策であり全体と部分の認識でもある。

2. 8 演 戯

神輿としてかついだ『芸術とは何か』、『人間・この劇的なもの』の中で明らかにした思想である。近代化問題とも関連し個人の確立、精神の近代化に結びつく、現実捉われず望ましい自分を迫及する生き方である。

絶対神を持たない日本の伝統文化は、「和の精神」を尊ぶ、あるいは家、藩、国を大事にする、すなわち全体の概念が優先されるもので、部分である個人の主体性は輪郭の薄い、はっきりしない特性を有していた。

西洋文化の流入により、また敗戦によって全体よりも個人の主体性が重視されるように時代が変化してきた。しかし、日本人としての文化が底流にあるため、多くの方は、他人の主張・存在感に戸惑い、自他の距離の変化に違和感を持った。

全体概念の優先、形式、道徳により表面に現れ難かった人間の特性である「我意」が前面に出て来る

ようになり、この「我意」との向き合いに面食らっているのである。福田の考える「演戯」は、この「我意」への対処法でもある。

しかし、西洋は早くからこのことに気づいていた。『芸術とは何か』に述べている。

アッティカ時代になると、かれらギリシア人もまた、人間の、自己の、醜い情念に気づきはじめてのであります。アッティカ時代のギリシア人ははじめて演戯することの必要を感じた。演戯するとは、真に自分自身になることであります。

(「全集2」『芸術とは何か』p.595)

ここに福田は「演戯」の本質を見出している。

『人間・この劇的なもの』においては、「演技」と「演戯」を比較して根本的な違いを述べている。

自分を他人に見せるための演技ではない。自分が自他を明確に見るための演戯である。

(「全集3」『人間・この劇的なもの』p.532)

すなわち、「演技」する者の意識は他人の評価にある。これに対して、「演戯」における意識は、真の自分のあり方、現実の味わいにある。続けて、こう述べる。

演技とは、さういふ揺れ動く偶然の諸要素を脚下にふまへて、自己の平衡を保つアクロバティックを意味するものである。たんなる對世間的な處世術に墮するゆゑんだ。(中略) ひとつの必然を生きようといふ烈しい意志は、どこにも見られない。本来、演戯とは現実の拒否と自我の確立とのための運動であるはずだか、いはゆる演技説の演技は現実とのつきあひのよさ、自我の妥協しか意味しない。

(「全集3」『人間・この劇的なもの』p.535)

現実の日常性に足を取られたり現象論に振り回されたりせず、本来の自己のあり方、全体の中の自分の位置を見出し、見失わないことである。問題は如

何に行動するかである。

福田の考え方はこうだ。肉体は現実、時間に縛られるが、精神は時間を超越し全体、自分のあり方、現実の姿及び他人を見ることができると考える。

これによって現実の自分を味わうとともに「全体」の中における自分の役割、すなわち「全体」に迫り自らの枠を見出すことができる。難しい我意もコントロールの可能性が高まり、他人との信頼関係も強くなると言うものである。

しかし、一人の行動としては可能であろう。他人が関係すると、彼等は現実社会、我意の世界において自分とのギャップが大きく生じる。肚を括らなければならない。孤独を恐れず、挫折に挫けない強固な意志が必要だ。そこで福田は「全体」を想起したのである。

福田の昭和四十八年のテレビ出演の状況を録画で見た。何か遠くを見ているようだ。焦点が定まっていないのではなく何も見ていない訳でもない。距離感を持って、全体あるいは神の目に映っている自分の姿を想像し、人格の完成体としてのあるべき自分を演戯しているのであろう。部分として全体の中で役割を演じ一体感を持っているのであると思った。

これは二元論でもある。「全体と部分」、「相対世界の人間と神」。ままたぬ現実世界であっても意識の世界で一体感に包まれている。その意識が、福田に自信と充実感を与えるのであろう。

福田は多くの論争を孤独を恐れずして来た。井尻氏は、福田に対する小林秀雄の援護を見て、「福田は決して孤軍ではない。」と言う。しかし、そうではない。福田の後には小林秀雄ではなく「全体」がいる。

福田の主張は、個の主張でもあり「全体」の主張でもある。福田には、「全体」の中の部分であり個性はない、その自覚がある。だから、孤軍奮闘ではない。小林秀雄が援護しているとか、中には理解している人がいるからとか、数の問題ではないとか言うが、そうではない。ここに「全体」の意義がある。

では、近代化問題に関する「演戯」の意義はどこにあるのか。

物質文明の発達の中で人間が置き去りにされ精神が追いついていない。日本人は西洋の精神を学ばず和魂との衝突を避けてきた。それは、我々自身、日

本の文化を客観的に認識する途を失ったことを意味する。その状態のまま物質文明だけが先行している。

同時に、日本と西洋の文化の差を認識できないことが現実問題となる。洋魂と和魂の間で日本人の精神が混乱し、解決の方途が見えない状態なのである。

精神の混乱から抜け出し健全な近代化とするために必要なのが「演戯」である。意識の世界では時間を超越できる。福田の提唱する「立ち止まる」⁹ことができる。全体の中で部分としての役割を認識し、役割に基づくあるべき自分と現実社会での自分とを状況により使い分ける。

これがすなわち、1人2役となり西洋精神に近づくことになる。精神の政治学ができ精神の近代化につながる「演戯」なのである。まさに自我意識のあるべき姿の追究であり、これが個人主義の確立に繋がる。

「演戯」は我意を克服し、全体の中での部分として、自分のあり方・個人の生き方を追究すると同時に精神の近代化を図るものである。これにより充実した、必然の人生を送ることができるのである。

2. 9 個人主義

個人主義は、近代西欧市民の精神的基調である。日本人は明治以来受け入れてきたはずだが、西欧の精神を消化し得なかった。

一般的には、国家や社会の権威に対して個人の意義と価値を重視し、個人の権利、義務と自由を尊重することを主張する立場、あるいは、個々の人格の独自性と自律性を重んじる立場であり、その時々形成された場の雰囲気流されることのない、一個人としての一貫性のある深く統合された思想と責任ある行動を高く評価するものである。

このような言い方自体が西洋の個人主義であり、それは権利、義務の契約に基づくもので、その辺の消息に馴れない日本人がそのまま導入すれば利己主義になるしかない。実際その傾向が窺われ、夏目漱石も指摘している。¹⁰

そもそも日本の文化的土壌は個人主義とは縁遠い。美学である「みえ」は強い自我意識が形成されにくく、全体との調和を大事にする意識は主張を避ける。

膠着性や分離が利かないことは、相対主義の悪循環に陥らせる。これは全体の見通しがきかない、孤立を恐れることを意味する。

本質的な問題として、福田は次のように指摘する。

現代日本の混乱は、かういふふうに和合と美とを生活の原理とする民族が、能率や権利義務を生活の原理とする西洋人の思想と制度を受け入れたことから生じてゐるのです。

(『全集3』『日本および日本人』p.189)

全体が強く個が弱い日本と個人主体の西洋、全く逆である。

西洋精神の上辺だけの理解にも問題がある。漱石が指摘したとおり、利己主義との混同である。個人主義の根幹を成すのは「自由」である。

日本人にとって「自由」はなかったものであり、責任を伴うなどの概念について理解不十分だ。そのため、利己主義に陥る危険性が大なのである。

また、個人の権利や義務などについても摘み食いの都合の良い所だけを取り上げ、本来の個人主義に結びついていかない。

福田は何を問題視しているのか。西洋の個人主義を身につけると言うのか、それとも日本独自の個人主義を確立せよと言うのか。どちらでもない、その差を認識しなければならないと言っている。

対象との距離感と福田は表現する。自国の文化と西洋文化の差を認識すること、距離をおいて批判的に見るということである。違いが分かれば対処の仕方も分かるのが道理だ。

日本と西洋の文化の差を認識するとともに自己の現実をしっかりと見る。そして、一人一人の道しかないことに気づくことが必要なのである。気づけば行動に繋がり個人主義の確立になるはずである。

しかし、文化上の問題であるため実行は簡単ではない。その中でも日本人が孤独に耐えられるかどうかである。福田は、個人主義は本質的に孤独であると、次のように述べる。

孤独になることによってしか、自我の存在は成立しない。存在感と孤独感と、どちらか一つ

だけですませることはできないのです。それが人間存在の矛盾でもあり、個人主義といふものにともなふアイロニーです。

(「全集4」『個人主義からの逃避』p.204)

それは存在感だと言うことだ。存在感を示すには孤独に耐えられなければならない。このアイロニーに耐えて、日本人は個人主義を確立しなければならないのだ。

福田における個人主義確立のための行動がすでに述べた「演戯」である。孤立を恐れず戦ってきた、「孤高の人—福田」と言われる所以である。

ここまで述べたように基本的に文化の壁がある。上辺上の理解、個人主義確立に程遠い「みえ」などの美学等やアイロニーである。

更に、福田は日本の文化である物事に徹底しない微温的性格、気分的信仰から個人主義の成立を危ぶんでいる。成立しなければ相対主義の悪循環から抜け出せない。近代化問題解決の最終目標である精神の近代化ができず、グローバル化の中で日本は埋没してしまう。

ここでもやはり「神」の問題が出てくる。どうしても日本の文化的弱点である個性の弱さ、膠着性を克服するためには「絶対」が要請される。「絶対」を設定することにより立体性が生じ、間接的に隣接する人以外の人と繋がり、孤独感が解消されるはずなのだ。福田の設定した「全体」に対する要請は個人主義確立からもあるのである。

⁸ 「全集3」『人間・この劇的なもの』p.569
及び「全集5」『翻譯論』p.87

⁹ 「全集2」『近代の宿命』p.432

¹⁰ 『漱石文明論集』「私の個人主義」p.123 参照。

(Received: September 30, 2010)

(Issued in internet Edition: November 1, 2010)

¹ 「全集3」『人間・この劇的なもの』p.527

² 『パンセ』p.200 298 項に、力と正義に関する記述。

³ 「全集4」『絶対者の役割』p.281

⁴ 「全集3」『日本および日本人』p.179

⁵ 『ヘーゲル』p.28 「歴史とは、ヘーゲルによると本質的に精神の歴史であり精神史なのである。」と述べている。

⁶ 「全集5」『歴史教育について』p.460 に、「歴史教育において最も大事なことは、何が事実かといふことではなく、何を事実と見てみたか、その昔の人の心に接することである。」とある。

⁷ 『全集第1巻覚書1』p.664